

第8号
1983

会報

にしきうら



高知県立須崎工業高等学校同窓会

目 次



御 挨拶	同窓会長 清 家 寛	1
多目的棟の新設を望む	学 校 長 宮 地 恒 雄	2～3
学 校 近 況	教 頭 竹 村 義 典	4
同窓会の末永い発展を求めて	同窓会長 清 家 寛	5
	事務局長 島 崎 良 一	
大 阪 支 部	山 田 豊	6
関 東 支 部	江 場 修 治	7
幡 多 支 部	吉 村 功	8
高 知 支 部	吉 岡 豊 延	8～9
中 京 支 部	岡 林 県 市	10
	春 田 陽 三	
野球部だより	植 田 豊 年	10～11
「ソフトボール部」活動報告	伊 藤 正 孝	11
会 則		12～13
昭和57年度決算報告		14
昭和58年度予算		14
事務局だより	事務局長 島 崎 良 一	15
終身会費納入者名		16～22
各種証明書の発行について		23
会報の発送について		23
編 集 後 記		23

ご挨拶

〓 母校並に同窓会の新計画 〓

同窓会長 清家 寛

同窓の皆さんお褒りありませんか、毎日お元気で活躍のこととお慶び申し上げます。

会報もお蔭さまで、第八号を発行することかてきました。おめでとうございます。

事務局の先生方には、何かとご苦労の多かつたことと思ひます。その御努力に感謝とお礼を申し上げますと共に、御寄稿下さった方々に對して、心から御礼申し上げます。

さて、母校ではいま新しい計画が進められています。それは、須工に新しい息吹きを興し、生徒の学習指導と、生活指導に新味を加え、母校の一層の発展をはかるため、「多目的棟」の新設計画が練られていることです。

このことにつきましては、本紙に宮地校長先生から詳しいご説明がされていますので、ぜひご熟読下さって、その主旨をご理解いただき、これが実現のため、また母校発展のため、積極的な御意見、御支援をお願いします。

この「多目的棟」実現の暁には、同窓会としてもその運営上に利用させてもらえる面も多いと思ひま

す。

母校のこの計画がまるとれば、同窓会にもより詳しい話があると思ひます。その折には会員各位にも連絡し、協議の上、同窓会としての協力的姿勢を整え御協力したいと思ひますので、その節にはよろしく願ひします。

次に本年七月開催の本部理事会におきまして、母校発祥の地（糺町の旧校舍跡地）に記念碑を建てることに決定しました。

記念碑のことにつきましては、会報四号に「野中 建一郎先生」が御寄稿下さっていますので御記憶の方も多いと思ひます。

既に会員中よりは、この建設について物心両面にわたる協力方の申出もあつております。

またこの建立に関する準備作業などについては、須崎支部役員の方々が一手に引受けて進めて下さっていますので、遅からず具体的な計画が出来上ることと思ひます。

野中先生の一文は、旧校舍に学んだ者にとつて、深く共感するものがあると思ひますので、改めてご

紹介させていただきます。

「校舎の移転というのは無論それなりに理由のあるものだが……。

それはそれとして、西糺の一角こそは今後どのようにならうしようとも、須工発祥の地であつて……星霜三十年、その間三千余の若者が糺の地に勉学の場を選び、人生の最も多感な時代をこの地に生き、遙かなる夢と、希望をこの学び舎のなかにはぐくみ築立つていったのである……。

私はこの……かつてこの地の学び舎に集り、そして散じて行かれた人々の若き日のよろこびと、涙の「しるし」を刻んでおかれたらと切に思う。」

（会報第4号、昭和54年発行より）

この記念碑の一日も早い完成を願つてやみません。

以上母校並に同窓会の新計画について申し上げましたが、どうかこれが無事実現し、母校並に同窓会が益々発展してゆかれますことを祈願いたしますと共に、全国各地の会員の皆さんが、ますます御健康で、御活躍されますことを祈ります。



多目的棟の新設を望む

校長 宮地 恒雄

学校が現在地に移転してきて既に十二年経過した。その間高校への進学率は急速に上昇し、生徒達の学方面も生活面も共に著しく多様化してきた。

教育課程の変更もあり、当然教育の内容や方法もずい分変わってきた。

私共教職員一同は一丸となって、須工に新しい息吹きをと、いま懸命に取り組んでいる。

私共を支援して下さるPTA、同窓会ならびに地域の方々からの暖かい励ましに、心から感謝している。

学習指導と生徒指導双方の観点から、これまでの歩みの跡を辿りつゝ、発想の転換を図り新味を加え、いっそう拡大、発展を期する新しい手だてはないものかと検討している中で出てきたのが多目的棟新設を望む声である。

〈多目的棟新設の目的〉

本校生徒の学力向上、健全育成のために、宿泊研修等多目的棟の効果的利用を通じて生徒、教員間の交流を深め、秩序ある生活習慣を育成する。

〈現在までの取組み〉

昨年来、新設について県教育委員会に要望してき

ているが、予算の厳しい情勢下でもありなかなか急に見通しは立ちにくい。

三ヶ月程前から校内に教職員七名によるプロジェクトチームをつくり、先進校の視察をするなどいっそうの研究を進めている段階である。

幸い谷口PTA会長及び清家同窓会長より全面的に取り組んで下さるむね激励の言葉をいただいている。

〈必要と考えている室〉

宿泊研修室、教職員会議室、生徒会室、体力づくり室及び学年別あるいは科別に生徒集会のできる室等の新設。加えて図書室の大幅拡張であるが、現校舎にある室との配置交換等研究の余地はあろう。

〈多目的棟の内容〉

いまプロジェクトチームで話し合っているものは、

一階 食堂、調理室、浴室等

二階 図書室、司書室、研修室等

三階 宿泊研修室（一室四〇名として二室）等

総床面積一、二七〇平方米、設置場所については、

校舎と運動場の間にある五つの芝生庭園のうち、北

から四番目の場所、南舎の西側に当たる。

〈宿泊研修の現況〉

柔道場を利用して夏休みなど三、四のクラブが合宿練習を苦勞して行ってきた。その結果は競技成績に好成績を残してきたが、其の成果は集団生活を通しての人間形成にあらわれている。

〈宿泊研修のねらい〉

- 1 教員と生徒が寝食を共にすることによって、人間的な融れ合いを深め、協同して共同生活の充実、発展に尽す態度を養う。
- 2 人間として望ましい生き方を自覚させ、将来の生活において、自己を実現する能力を育てる。
- 3 集団規律の大切さを学び、社会連帯と自治的能力の伸長を図る。

クラブ合宿で既に立証済みの成果を、クラブのみならず学校の教育活動のあらゆる分野に拡げたいというわけである。その為には、もはや柔道場を一時転用する臨時的措置ではなく、特別に設計された建物を望む次第である。

〈宿泊研修分野〉

1 教科指導

宿泊又は早朝補習を行い進学、就職にそなえる。

(1) 基礎学力不足生徒に対する補力補習

(2) 成績優良者をのばす強化補習

(3) 国家試験（電気工事士試験等）対策補習

2 集団指導

(1) 新入生のオリエンテーション

(2) ホームルーム単位の研修

- (3) 生徒会役員研修
- (4) 列車通学生の通学マナー指導
- (5) モーター通学生に対する交通安全指導

3 個別指導

問題生徒をつき離すのではなく、ききつける指導を行う。

(1) 基本的な生活習慣が極端に身につけていない生徒の指導

(2) いろいろな問題点をかかえている生徒の指導

(3) 問題行動を起した生徒の指導

4 特別教育活動

体育及び文化クラブの合宿、早朝、放課後練習

以上主として目新しい宿泊研修室を中心に多目的棟の新設を望む声を伝えてまいりましたが、最後に〈必要と考えている室〉のところに書いてあります。体力づくり室について説明いたします。

残念ではありますが、本校生徒の体格は身長、体重共に県下平均を下まわっているし、年一回県下一斉に実施される運動能力テストでも平均に達していません。

卒業後いずれの職場で働くにしても、他校出身者と肩を並べてゆく為には、学力もさる事ながらやる気と体力が物を言うのではないのでしょうか。他にあまり類はないかもしれませんが、体力づくり室は本校にとって必要であると思う次第であります。

生徒ひとりひとりの個性を生かし、能力、適性、興味、関心、意欲を育てる学校づくりには教職員一同努力いたしております。

ここに、本校発展のため一つの夢をえがいている

わけてですが、夢を夢で終らせず実現へもってゆくため粘り強い努力をいたしたいと存じます。御批判と

積極的な御意見を寄せて下さいますようお願いいたします。



中庭花壇（生徒から募集のデザイン）

学校近況

教頭 竹村義典

昭和五十七年度卒業生は機械科六七名、造船科一七名、化学工業科二名、電気科六九名の計一七四名で、卒業生総数は五九六四名(女子五二名)となりました。そして中学を卒業する者の数が平常年にもどり、かつ工業高校志望が漸増する傾向の中で、久し振りに定員に近い二二三名の新入生を迎えることができ、喜んでおります。

人事異動関係では開校当初よりお務めの広瀬雄助先生が定年退職されました。先生は優れた機械工作技術を指導され、産業教育七〇周年全国生徒実習作品展に機械工作クラブの出品した三馬力船用石油エンジンが機械部門第一位(通産大臣賞)に入賞した影の功労者であり、機械科長、進路指導部長も務められ、また卒業証書の記名もされる等、永年のご労苦に感謝申しあげます。本年度は造船科の機械部門時間講師として指導されております。昨夏亡くなられた阿曾義近さんの後任としては、橋本満治さんが去年一〇月より来られています。それから昭和二十七年より三〇年余、主任技師として勤務の松本亀男さんが七月一日で退職されました。松本さんには夜勤のみならず、種々の学校行事、同和教育等でも大変お世話になり、ご指導をいただきました。厚くお礼を申しあげます。

その他の人事異動につきまして紹介します。

転任(退職) 着任

山崎寿男(国)	丸の内高	松本留美子(国)	宿毛高
今西利恵(国)	幡多農高	切詰昭典(国)	時 隣
明神利道(数)	榊原高	寺尾 康(数)	新 採
池田 功(数)	高岡高	白川正人(数)	新 採
島山智恵(理)	高知東高	北村公良(理)	時 隣
前田孝親(英)	須崎高(定)	森岡 学(英)	室戸岬高
矢野隆司(体)	高知高	坂本珠夫(体)	須崎高(久)
広瀬雄助(機)	退 職	西川哲夫(機)	高知東工
田村泰雄(機)	退 職	東川健一(機)	高知東工
浜田順一(船)	高知東工	岸本典幸(船)	新 採
岩瀬哲哉(化)	高知工(定)	岡本稚道(化)	高知工(定)
橋本俊彦(電)	高知工	山本俊平(電)	新 採
西森富士夫(電)	退 職	川崎太一(美)	時 隣

さて、昨年度はどうしてか悲しみ事が多かったの
で、二月には神官を招き、お祓いをし、今年二月
には校地造成時の無縁仏の盃を祭る神社を校庭の北
側に建立しました。精進すれば、母校を守ってくだ
さる事と信じます。

昨秋の中学生一日体験入学には、総勢二二名の参加がありました。文化の日には、広瀬雄助先生、田所靖通先生が産業教育功労者として表彰されました。二月には大野見村島ノ川の学校林へ除伐作業に行きましたが、植林後一〇年、大きく育っております。

本年度新入生より胸に校章のついた制服を着る事になりました。上級生も制服に準じております。頭髪、服装の指導には、特に力を注いでおり、また生徒会も積極性のある執行部ができ、六月末には全校

総出て学校附近の大掃除をする等、好評を得ております。一月一三日には三年に一度の文化祭が予定され、昭和六〇年には多目的研修棟の建設と計画をすすめております。

ヨット部が今年も国体に出場します。競走艇のないハンデイはありますが、真黒に日焼けして練習に励んでおります。そしてソフトボール部が県下三位と安定した力をつけ、国体選抜軍に三名選ばれ、四国予選を突破しました。復活四年目の野球部は県体で東工を7対0で破り公式戦初勝利をしました。二回戦は延長二一回、伊野商に惜敗。甲子園予選では大方商に1対4で敗れましたが新人の秋選抜予選は西高を降して出場、中村高に2対3善戦と評されるようになりました。軟庭部は個人戦で吉門、武田組が入賞し、四国大会まで駒を進めました。相撲部の活躍がないのは淋しいことですが、陸上、空手、柔道、卓球等の個人戦では入賞へ今一步の者が居ります。一時期、グランドに草が生えて困ったことがありましたが、最近では各部共練習に熱が入り、体育館共々狭くて困っております。多目的棟で宿泊ができ、トレーニング室も完備される日を期待するものです。卒業生への求人、一昨年、昨年、今年と格段の差で厳しくなってきました。良き後輩の育成に心掛け、努力致しておりますので、ご支援の程よろしくお願いいたします。

末筆になりましたが、皆様方のご発展とご多幸を祈ります。

同窓会の末永い発展を求めて

同窓会長 清家 寛
事務局長 島崎 良一

会員の皆さんお褒りありませんか。「にしきうら」もお蔭さまで8号を発刊することができました。

会報が毎年発行できるのは、会員各位の御協力のもと役員並に幹事の方々、更に母校諸先生方の御理解ある御協力、御指導の賜物でございます。会を代表して心から感謝と御礼を申し上げます。

一昨年本部総会が母校で開かれ会員多数のご参加を得、また校長先生はじめ諸先生方の御臨席を得て盛大に開催することができました。

さて「同窓会の現況は」前号でお知らせしました様に本会の発展のための基礎づくりの時代のように思われます。

会員の皆さんには、公私ご多忙のことと思いますが、母校の発展と共に同窓会の発展をはかるため次のことについて格別の御理解と御協力をお願いいたします。

会員の皆さんにお願い

一、同窓の親睦を深めて下さい。

企業内や地域内では、須工会や同窓会が行われているところが各地にあります。今後はより多くの企業や職種で同窓の親睦会が開かれるよう御努力下さることをお願いいたしますと共に、会が開かれた場

合はその様子を会報に載せて、全国にご紹介させてもらいたいと思いますので、その記事及び写真を本部事務局まで送って下さるようお願いいたします。

また総会や支部会へは、進んで参加し、より多くの同窓を知ると共に親睦を深めて下さい。

後輩達は年々新しく加入して参ります。先輩の方々は後輩をどうか暖かく迎え、引き立て、やって下さるようお願いいたします。

二、会費未納の方は

「終身会費」を納めて下さい。

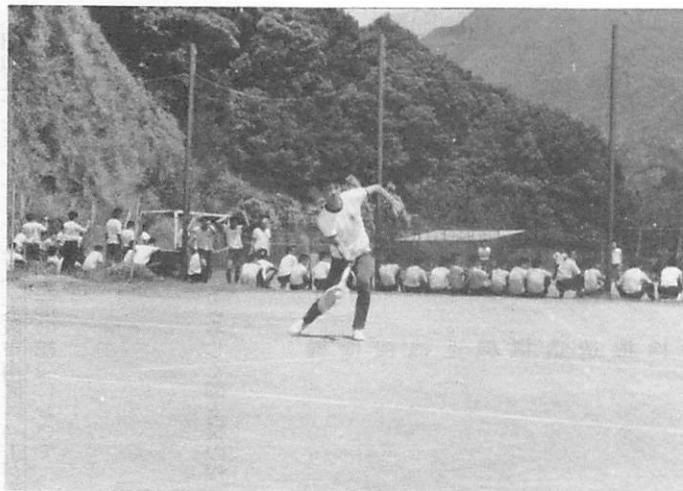
数年前から後輩達は、卒業の時点で殆んどの方が終身会費を納めてくれています。またそれ以前の卒業の方々からも終身会費を納入してもらっています。同窓生の全体から見れば僅少です。同窓会を今後大きく発展させるために、会員の皆さんの御賛同を得て、会費を「終身会費」一本にすることが出来れば、会は大きく発展できる財源の基盤が確立します。昨年の本部総会にこの件を提案、参加者全員のご賛同を得まして、会費は終身会費（一万円）に統一することに決まりました。

既に実社会にご活躍されている同窓の皆さんには、何かと出費の多いこと、思いますが、右事情を御賢

察下さいまして、本会発展のため、未納の方はなるべく早い時期に、終身会費を納入下さるようお願いいたします。

尚その納入については、分割払（一ケ年以内）も結構です。何卒ご協力下さるようお願いいたします。

終りに臨み、会員の皆さんの御健康と、ますますの御活躍を祈念し、併せて母校の御発展を心から祈りいたします。



大阪支部だより

大阪支部発足の御挨拶

21機卒 山田 豊

同窓会会報の誌上をお借りしまして大阪支部の皆様におおせつかることとなりました。

去る五十七年十一月十三日、大阪、南ニュージャパンにおきまして清家同窓会長、島崎同窓会事務局長の御出席を頂き大阪支部の総会が開かれ新支部長をおおせつかることとなりました。

もともと私は人のお世話をする柄でもなく同窓会に対する一つの見識をもっている訳でもございませぬ。私自身は同窓会を同窓会らしく運営するために先輩後輩ともに中広く顔見知りであるもつと新しい年齢層の方を支部長に推しましたが、何か年功序列的な意見におおされまして今日に致った次第です。

さて、今回新発足しました同窓会大阪支部はもともと近畿支部として昭和二十六年頃発足し第一期生の西川嘉明さんが支部長になられ、その後近畿支部が総会への出席とか会員との連絡等に大変不便が生じ神戸支部、京滋支部、大阪支部に分割されることになりましたが、この間約三十有余年同窓会のために大変な御盡力を頂いた西川さん的人格識見を慕って今日に至った次第でありまして、西川さんに厚く御礼申し上げます。今後も従来同様御指導をお願い申し上げます。又、近畿支部が大阪支部への分割に

つきまして大変な仕事を引き受けて頂きました役員の方々にも重ねて御礼申し上げます。

これからは、皆様の御努力によりまして新しく出発する大阪支部でございます。あまり難かしいことをよう申しませんが、この同窓会を親しみのある同窓会、故郷を味わえる同窓会にして頂きたいと思えます。単なる会員の集いということになりますと、卒業年次も違い面識も全くないということと、疎縁の大きな原因にならざるを得ません。そのために勤務先とか卒業年次をグループとした核を作り、その核の幹事を中心として同窓会を運営していくといった組織を固めていきたいと思っております。この制度は先般前役員の方々にレールを敷いて頂いておりますので、その上に乗っかって運営して頂きたいと思えます。又この制度がうまく機能するかしないかは同窓会運営の鍵となるのではないかと思っております。よろしく御理解の程お願い申し上げます。

先程私は親しみのある同窓会と申し上げましたが今まで全く面識がなかった間柄の人でも、母校の同期、先輩後輩ということになりますと、何か急に親しみを感じ、学校時代の思い出話、同郷の話などから親しい間柄になることは決して珍らしいことではありません。こういう意味からも同窓会をどしどし活用して頂きまして、お互に発展していくならば、こんな喜ばしいことはないと思えます。

あれこれと、とりとめのないことばかり申し上げましたが、最後に皆様方の後健勝と今後益々御繁栄されることをお祈りしまして私の挨拶とさせていただきます。

お知らせ

昭和五十七年十一月十三日、大阪市南区ニュージャパンにおいて行われた大阪支部の総会において

一、近畿支部分割の経過報告

二、会計報告及びその承認

三、役員改選

新役員は次のとおりです。よろしく御支援の程お願い申し上げます。

役職	氏名	年齢	機卒
支部長	山田 豊	21年卒	機
副支部長	下村 昇	24年卒	機
理事	奥代重恭	24年卒	機
	吉川貞造	23年卒	機
	楠瀬富万	25年卒	機
	近藤久重	26年卒	機
	池 速水	26年卒	機
	竹下哲夫	29年卒	機
	松本忠雄	29年卒	機
	大崎光春	32年卒	機
	高橋昭之	35年卒	機
	浜崎満良	40年卒	機
	浜口 博	40年卒	機
会計	松村隆司	32年卒	機
会計監査	吉本静夫	23年卒	機
	汲田正一	26年卒	機
顧問	西川嘉明	18年卒	機
	島崎憲一	18年卒	機
	山田弘市	18年卒	機

関東支部だより

(33 船卒) 江場 修治

同窓会の皆様、それぞれの分野、職場にありましてお元気に活躍の事とお慶び申し上げます。

扱、田所支部長より会報の原稿を依頼されましたが、文筆拙い私ですのて何を書けば良いのか迷いました。

その結論は自身の一番身近なこの会社の現状を広くお知らせしご理解ご支援により須工出身者の良き受口にと思つた次第です。

昭和圧接株式会社の創立は昭和三十九年三月、以来一貫してガス圧接工法と言う特殊技術で建設業務に従事致してまいりました。

その受注比率は九十五パーセントが公共施設工事であり五パーセントが民間工事であります。

この業界で「昭和」は全国トップとの評も耳に致しますが小規模の末熟な会社です。

この日本をより豊かに住みよい環境を、と国土開発計画を推進する国策の一端に協力寄与している業種だと自負している次第です。

当社の須工出身者は私を含め六名で

圧接部門には先輩の

18年機械科卒 野 憲正

を取締役営業部長に就任願い良き協力者として私を補佐、営業全般の指揮統率を任せておりますがその

活躍は熟年の渋みと円やかさで受注高も年々向上し、企業運営の活発化も軌道に乗る昨今で得がたい良き先輩の在社を心より感謝している次第です。

技術部門には先輩の

47年造船科卒 西村 富喜

48年造船科卒 野 中政和

がベテラン技術員として第一線の建設工事現場に活躍中です。

鉄筋事業部門には同期の

33年造船科卒 正木 恵

が常務取締役として鉄筋部門の最高責任者となり、社員並に下請業者を統括、指揮監督、積算、加工、保管管理、納入運搬配筋等、建設工事現場での三役の一員として建設会社との折衝業務に活躍中です。

軌道事業部門には先輩の

54年機械科卒 安藤 輝美

がレール圧接の技術員として活躍中ですが、東北並に上越の新幹線のロングレール製作にも従事、この大動脈建設工事を直接手掛けた現在の勤務姿勢は積極的になった事で自信ある行動はこの若い社員の一つの心境の変化と見る事が出来、立派な社会人に成長した事に喜びを抱く企業者の一人です。

鉄道の生命はレールである事は論を待ちませんが、乗客が安心して旅を楽しむ裏には此の様な若い人々の真摯な態度と優秀な技術のある事を知るべきだと思います。

この様な若い社員を育成し社会人として歩む道を体験させる事が将来の本人並に会社にとって良い成果を生むと信じております。

会社としてもこの東北、上越の工事は山陽新幹線

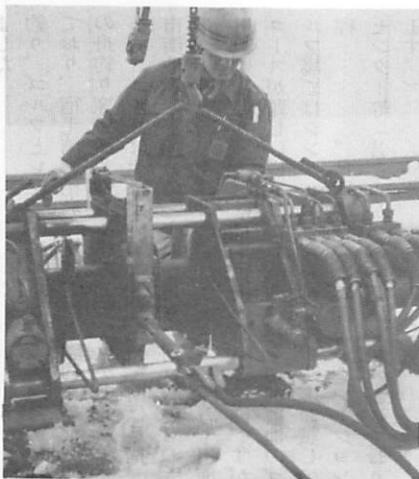
の実績が認められたもので、新幹線一服の現在では在来線のロングレール圧接に従事しております。

この他溶接事業部、海洋土木事業部がありますが海洋土木の分野については圧接以上の事業に発展する事は間違いなく、在来のテトラポット工法を凌ぐ特許工法で、当社は代理店となり各官公署の受注も順調に進み将来の目玉業務となる事でしょう。

船舶港、漁港、物揚場、岩壁、護岸等に波を消し、水が通い魚がつかうと言う防波、消波、魚礁を兼ねたネプチューン工法と言う画期的なものです。

当社はこの様な公共施設建設を業とする真の男子の職場ですのて特に若い方々の精力的実行力を期待するものです。

社内事情のみに終始しましたが同窓会員の皆様方のご理解とご支援をお願い申し上げます。
最後に母校の隆盛と同窓会の益々のご発展ご活躍をお祈り申し上げます。



幡多支部だより

中村方面の近況と観光案内

21機(2種3期)

吉村 功

同窓会の皆様方にはますます御健勝にてお過しの事とお慶び申し上げます。

幡多支部も、発足以来格別な活動、行事等もなく、恐縮に存じておりますが、ただ今迄知らなかった同窓が街で会つたりした時、元氣かね」と挨拶が出来た。何れにしても早く陣容を整えねばと考えております。これも前回はしたかお知らせした様に、支部長、副支部長等中堅幹事が殆んど転出され、止むなく暫定的に私が支部長代行をお領かりしている次第です。

今年中には必ず總會を開催し、何とか幡多支部を一新しなくては、折角発足当時は西村校長先生、清家会長、吉岡氏を初め諸先輩に遠路わざわざ激励祝賀に馳せ参じて頂いた事等思い出すにつけ、また母校に対しても申し訳なく思っております。

さて今回は当地中村方面の近況の一部を御紹介する事に致しましょう。御承知の様に応仁の乱を逃れた一条公が中村を為政し(今でも一条神社として街の中心に位置し、市民尊厳の的として秋には県下三大祭りの一つとして盛大に行われます)京都にあやかつて今と言う都計も碁盤の目の様な街になっており、町名も京町、八反原、小姓町、右山とか、近郷も安並、東山、後川、八東等、大文字山もあり、夏

の祭りの夜はくつきりと大文字が浮びます。

そして、幡多の人は声をヒク」と言われますが、中でも女性の発音は情愛豊かな様にもとれる場合があります。たまに高知へ行き呑屋のママさんの言葉は荒々しく感じます。「中村のオンチャンまた来たかよ」とか、いわゆる高知方面より当地域が標準語に近いとも言われておりますが、これも一条公の教育の影響であるとも聞かれます。市民憲章にも、事故のない心豊かな健康都市づくり」を掲げてある様に、情緒に富んだ集落街でもあります。

また日本で一つしか残っていない公害のない清流と言われる四万十川の終着地点で、鮎、鰻、ツ蟹等の特産品あり、ついこの間は南方産のジャンボな魚が上つたとか……テレビにて今放映されている「宵待草」等最近とみに当地がクローズアップされて来

高知支部だより

58年夏『たたえ！はげまし！』

サカナにするパーティー』のことなど

私たちのこの会にとつて、何にも増して大切なことは自信と連帯

月仰ぐ先輩子科練の……月と昔の歌にもありますように、「仰がれる事」「人の、言うに価する事」、これが後輩のついてくる道でもあります。

戦中、戦後の卒業生がスキ腹でひたむきにかんば

ました。

釣り、ゴルフとレジャーについても最適地と言われており、宿毛湾、柏島、足摺方面の磯釣り、下田沖の舟釣り等多種多様ありいろ／＼な魚が上つております。ゴルフは北は土佐ユートピアCC、南は足摺CC市街地より十数分の一歩りにあり、何れおとらぬ太平洋一望絶景とも言われております。又四万十川河川敷にもあり、これは日本屈指の低料金のもですが、コースが難しい様でここてハーフ40を切れば他のゴルフ場ではシングル級と言われます。一度お試しの程………。足摺観光或は御荘のレクリエーションセンター等(昔なつかしい紫電改も陳列されております。)

観光の節は是非中村もお忘れなく観光されます様お願い申し上げます。

高知支部長 吉岡 豊 延 (20機)

つた中てつかんだ栄光と、既に後進へ道を開いた同窓が、この年度に高知のマスコミに乗り私たちは一さわ自信をもちました。

そこで、いつものメンバーと語り、「これらをサカナにして呑もうじやいか」と一決

註 高知市では「ちよつとやらんかよ」と一声

かければ、いつもの仲間一五名位はすぐワ
リカンをもって集まる。

これは清家前支部長の良き指導のセイであ
る。

私達がこの夏「たたえ！はげまし！」たのは、次
の七人の方々です。

田村耕吉 18 M 県庁副出納長(退職)

大崎二郎 20 M 詩集走り着て小態賞壺井賞受賞

武内昌良 20 M 高知警察署教養主任(退職)

小松章洋 20 M 県庁営繕課長

亀山和夫 21 M 県庁議事事務局局長

西森正忠 26 M 高知大丸取締役営業部長

横川寛水 28 M 高知市議会議員(連続三期)

「いろくへリクツを言わさず、素直に、彼らの
血のじむ努力の跡をたたえましよう」

「そして追いこそう！」

「どんくえらいてがてきよるけ、又その人たち
を招いて肴にさしてもらおう」

そんな和気あいゝの雰囲気、会費を安くせん
といかん(二千円)と話し合せて、私の会社の庭で
の立食パーティは、18年卒のシラガ頭やハゲ頭から
52年卒の唇の黄色い青年(憐宮地照明勤務。沖の島
出身。田部泉)まで七〇数名が参加

ビール。ショウチュウ。ウイスキー

乾魚。骨つきのとりのパーベキューに漬もの

(会員の仲間が安く提供してくれるので助かる)

あれやこれやでこじやんとやりラストは校歌の大
合唱で賑わいました。

母校からは宮地校長先生のご参加をいただき近況
報告やらてたかまりをつけて下さり、紅一点中越(

旧姓市川)範子さん(38 C卒)も出席していろいろ
を添えて嬉しいことでした。



宴たけなわでは、功成つた七人の侍をまぶしげに
仰ぐ若者たちの姿に心温まる、須江同窓ならてはの、
それは「ふれあいドラマ」でした。

高知支部では、こんな形のいろんな交
流会をたびく催して強い連帯感を育て
てゆこうと、みんなて努力しています。
皆さん高知市へ来たら寄つとせ。

記念写真は「あたご写真館」(30 T卒)
江淵俊明君の撮影によるものです。



中京支部だより

中京の現況報告について

23機卒 岡 林 県 市
24機卒 春 田 陽 三

七月下旬、機関紙「にしきうら」に支部便りを書くようにと要請がありました。創刊号から、現在まで殆んど、支部長だけが投稿をしており、今回は支部会員に一筆書いてもらえば、誠に意義があることと思ひ、あちこち連絡をして見ましたが、色好い返事を頂く事が出来ないまま、九月に入つて了しました。

本部の編集部の事を考えると、一日も早く投稿をしないと、全体的にも計画が停滞するだろうし、そうかと云つて、便りらしき内容も書けそうにもなく、困り果てていましたが、意を決しまして、現況のままを書くことに致しました。

想えば、昭和四十五年八月九日、中京支部の設立総会を開いてから、かれこれ十三年の歳月が流れました。当時の二十余歳の人が三十余歳に、三十余歳の人四十余歳になり、就職した当時の下宿住いや寮生活にピリオドを打ちまして、家を新築して、転居されたもの、会社での手腕を買われて、他府県に転動された者、Uターンされて、故郷へ帰つたもの等がありまして、会員相互の連絡すら、困難な現状となつております。

このまゝでは、中京支部の存続も危ぶまれると、

副会長、春田君にも相談し、いつまでも、吾々のもて、中京支部を維持していたならば、会員の皆様にも申し訳ない事になるから、早い時期に何とか、総会を開いて、新進気鋭の役員を選出して、中京支部の発展を促し度いと、二年間ばかり話合つていた訳であります。夫々の仕事の都合で、なかくと機会がつかれず、八月に至りました。自分達の都合だけではいけないと、八月二十八日(日)を総会の日として、六月頃から準備、七月二十五日、案内状を発送、八月二十日迄、出欠の返事待ちとして、往復葉書で、通知を致しましたが、出席者が少なく、残念乍ら、遂に流会の憂き目を見るに至りました。

このような低調さは、吾々の責に期する一語であります。加えて、八月という、夏休みの季節を選んだ事も失敗でした。何と言つても最大の理由は、毎年行ふべき総会が途絶えていた事、十余年の間、さして活動のアイデアもなく、全体的に、支部としての魅力を喪失した結果だと思われまます。

今後の対策について

以上の結束から、このまゝでは、母校に対しても、中京の人々に対しても申訳ない事になります。さりとて、私共としまして、決定的な対策が見当りません。只、言える事は、同じ職場に就職している人、又同年期に卒業した者は、夫々、連絡を合し、文通を密にしておられる人も多いようです。

私共とは、年齢の開きもあり、その点でも、障害になつてゐるかも知れません。中には「須工の中京支部を發展さす」意欲に燃えている方々も、居られると思ひます。特に年々、母校を巣立ち、此の地区に就職する後輩は、年と共に増加しております。そ

して巣立つた数年こそ、支部の存在が重要な役割りを果たすのであります。

現在のように有名無実では、今後にも、重大な禍根を残す事となります。今回を区切りとして、一応すべてを白紙にして、再出発するのが良からうとの結論に達し、紙面をお借りして、報告する事に致しました。

どうか私共の苦境を斟酌されまして、再攀に、御協力賜りますようお願い致します。

野球部だより

顧問 楠 田 豊 年

部復活以来四年目を迎えた本校野球部の昨年一年間の活動状況をお知らせします。

夏の大会が終つてから、八月二十五日より開催される読売旗争奪の選抜大会に出場(十六校)するため、八月十日の高知工との予選に三対二で勝ち、選抜大会で大方商戦に臨みました。一、三回に六点を先行され、リリーフ北添(日高中)の力投と打線のふんばりて四点を返しましたが今一歩及ばず惜敗しました。

十一月一日から行われた秋季四国大会県予選では中村高(四国大会出場)と対戦し、初回に一点先行しましたが中村の長打攻勢にあい八点を取られ、七回四安打を集中して二点を返しましたが結局八対三で敗れました。歳が明けて三月二十五日より中村、大

方面球場で春季四国大会高知予選が開かれ、強豪安芸高(夏の大会ベスト4)と対戦し、外野守備が乱れ又豪球小松投手に完全におさえこまれ六対一で完敗した。

五月三日より行われた県体では一回戦高知東工と対戦し、四回に六安打を集中し五点、五回にも二点を追加して七対〇で七回コールド勝ちしました。二回戦の伊野商(ベスト4)戦では、初回連打で一点先行され八回表にも外野のミスで一点追加されましたが、その裏に死球、二塁打の無死三塁に岡崎(上分中)の左中間安打で同点に追いつき九回にも二安打、四球でチャンスをつかみ、八回に適時打を打っている岡崎にまわり、岡崎の一撃は一塁の頭上をライナーでおそいましたが一塁手がジャンプ一番超フラインプレーに阻まれサヨナラ勝ちを逃し延長11回に二点を取られ惜敗しました。

県体の善戦をバネにして全国選手権高知大会に臨むに当り七月十二日より十七日まで合宿練習をして対大方商戦に必勝のかまえていどもましたが北添投手(日高中)の球が高目に浮く所を長打され四点を失いました。我校は初回先頭浜田(須中)の左翼越え二塁打が出たが牽制死、三回国広(佐川中)の左翼線長打が二塁寸前で憤死、七回にも岡崎兄弟の長短打で無死一、三塁とし、北添の左機飛で一点返し、そのすきに岡崎第二塁にタッチアップしたが寸前タッチアウト等走塁ミスが目立ち結局四対一で敗れました。

又夏休み中に行われた前記の読売大会は予選で高知西高を四対三でサヨナラ勝ちに下し八月二六日の対中村戦(ベスト四進出)に臨みました。今年の中

村は平均体重七二kgの大型チームで甲子園を十分狙えるチームです。明神投手(佐川中)の力投とバツクの堅守で無得点におさえましたが五回に三安打を集中され一点を取られました。又、六回表山崎(葉山中)、石川(伊の中)の連打の後、浜口(朝ヶ丘中)が右中間突破の三塁打を放ち二対一と逆転しましたが七回の一死満塁のピンチに併殺くずれ同点にされ、九回エラーとヒットで中村の軍門に下りました。

現在二年四名、一年十三名の十七名の新チームで七時すぎまで練習に励んでいます。全体的に感じる事は生徒の体格、体力のなさと場数の少なさで思い切りの悪さが目立ちます。チームが若いので諸先輩の力を借りなくては強化できません。近所や御子息に入部希望者がおりましたら積極的に入部するように勧めて下さい。

又十月には後援会も結成してマイクロボスの購入等を計りチーム力の強化を計りたいと考えておりますので是非力をかして下さい。

「ソフトボール部」

活動報告

顧問 伊藤 正 孝

本年度の男子ソフトボール部の活動状況を報告させていただきます。

本年度は、三年生九名、二年生九名、一年生三名の計二十一名でスタートしました。そして、日本のトッププレイヤーのプレイを見、練習を見て、技術的、精神的両面でも向上する事を期待して春休みに愛

知県へ遠征合宿を行いました。また土、日曜日も返上して練習してきました。

その結果、春季選手権大会では第三位、県体ではベスト4、国体予選でも第三位という成績を残す事ができました。いずれも、本年度インターハイで全国優勝を成し遂げた学芸高校を破る事ができず全国大会にあと一步の所で終ってしまいました。部員も全力を出し切ったままです。成績だと思つてい

国体予選三位入賞の結果本校から三年生の浜口直己、片岡正人、三宮正裕の三名が国体の高知県選抜チームのメンバーに選ばれました。八月に行われた四国予選も勝ち抜き、十月十六日から国体を目指して毎日曜日、学芸高校での合同練習に励んでいます。きつと期待に応えてくれると思います。

さてソフトボール部の現状ですが、三年生も引退し、二年生八名、一年生五名の計十三名での新チーム作りに励んでいます。二年生も夏の合宿を越えて一段とたくましくなり、昨年に劣るチームを目指しています。この秋には、本年の成績で選ばれた県内八チームで行われる選抜大会にも参加が決定しており、この大会や十一月の新人戦で成果を示そうと、毎日練習にがんばっています。

また勝負のみではなく、あいさつ等の礼儀や団体競技を通じての規律やチームワーク等の人間的な成長も重視し、輝やかしい伝統を持つ本校ソフトボール部として恥ずかしくない様に努力したいと思

今後とも他クラブ同様、皆様方のあたたかいご声援をお願いいたします。

高知県立須崎工業高等学校同窓会会則

才一章 総 則

才一条 本会は高知県立須崎工業高等学校同窓会と称する。

才二条 本会は会員の親和、母校の隆盛を図るを目的とする。

才三条 本会は本部を母校に置き、正会員多数の地域（職域）に支部を置くことができる。

才二章 事 業

才四条 本会は才二条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 会報並に会員名簿の発行及び配布
- (2) 母校の発展に関すること
- (3) 会員の親和に関すること
- (4) その他他の目的達成のために必要なこと

才三章 会 員

才五条 本会の会員は次の者をもって組織する。

1. 正会員
 - (イ) 高知県立須崎工業高等学校を卒業した者
 - (ロ) 高知県立須崎工業高等学校併設中学校を卒業した者
 - (ハ) 高知県立須崎工業高等学校を卒業した者
 - (ニ) (イ)(ロ)(ハ)に在籍した者で会長が推薦し理事会が認められた者
 2. 準会員
 3. 特別会員
- 高知県立須崎工業高等学校在校生

才四章 役 員

才六条 本会に次の役員を置く

会長一名・副会長二名（内一名は本部事務局長を兼ねる）・会計一名・常任理事若干名・理事若干名・監事二名

才七条 役員は次の通りとする。

- (1) 会長、副会長、会計、監事は理事会において選出する。
- (2) 理事は総会において選出された者および母校在職正会員とする。
- (3) 常任理事は理事会で選出する。

才八条 役員は次の通り定める。

- (1) 会長は本会を代表しその運営を統括する。
- (2) 副会長は会長を補佐し会長事故あるときは、その職務を代行する。
- (3) 事務局長は本部事務局を主宰し、本会の事業を執行する。
- (4) 会計は本会財政の運営に関し、予算収支の企画および収支の執行に当る。
- (5) 常任理事は本会の常務を執行する。
- (6) 理事は本会の重要事項を審議する。
- (7) 監事は本会の会計監査に当る。

才九条 本会に名譽会長を置き母校校長を推戴する。

才一〇条 会長が必要と認めるときは、理事会にはかり顧問および相談役を置くことができる。

才十一条 役員は任期は二ケ年とする。但し再任は妨げない。補欠のために就任した者の任期は前任者の残余期間とする。

才五章 会 議

才十二条 本会の会議は総会、理事会および常任理事会とする。

才十三条 総会は二年毎に開催し、必要に応じ臨時に開催する。

才十四条 総会は会長がこれを召集し、出席者の過半数で決定し、可否同数のときは議長が決定する。

才十五条 理事会は次の場合に開催する。

- (1) 会長が必要と認めるとき
 - (2) 理事の過半数の請求があったとき
- 才十六条 理事会は総会に次ぐ決議機関で次の事項を決定する。

才一七条 常任理事会は会務の迅速円滑な執行をはかるため、総会および理事会の決定にもとづき、直接業務に必要な事項を審議し実行する。常任理事会の決定および実施事項は理事会に報告し、承認を得なければならぬ。

才六章 事務局

才一八条 本部に事務局を置き、事務局長が統括する。

才一九条 事務局の構成は次の通りとする。

- 1、事務局長
- 2、会 計
- 3、母校在職正会員

才二〇条 事務局は総会、理事会、常任理事会の決定に基づき必要な会務を執行する。

才七章 会 計

才二二条 本会の財政は会費、入会金、寄附金その他の収入によつてまかなう。

正会員は会費（終身会費）を納入しなければならぬ。

会費（終身会費）は一万円とする。

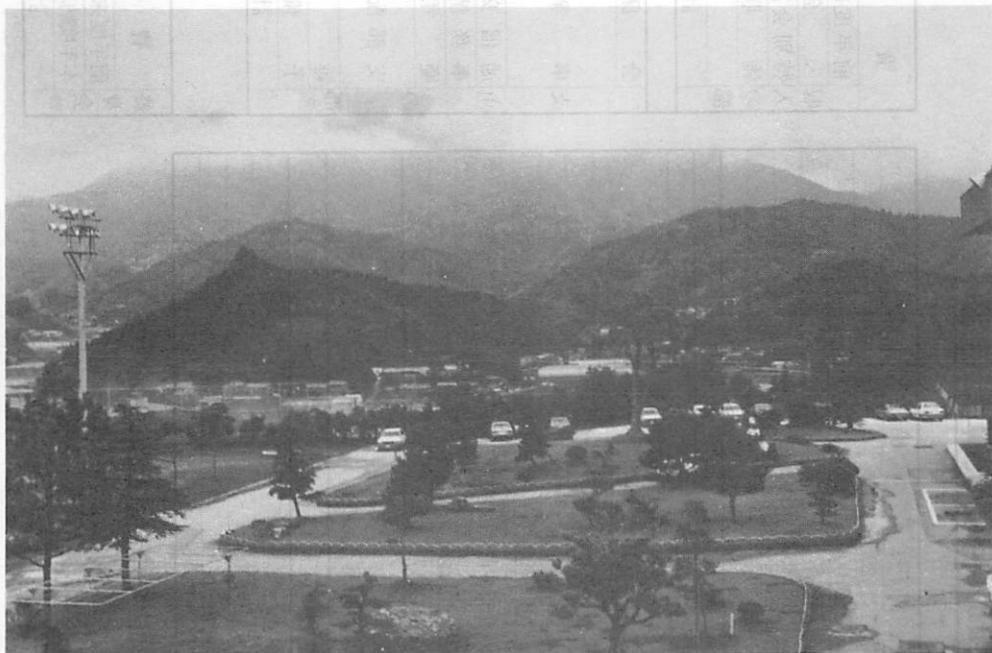
入会金は入学時二千円を納入するものとする。

才二三条 本会の会計年度は四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

才二三条 本会は会計年度末に会費納入者一名に付二〇〇円の割合で支部に対する配分金を計算し、翌年度六月末までに還元する。

附 則

昭和五年一月二〇日施行の本会則は、昭和四年三月一日改正、昭和五年八月一日改正する。昭和五六年八月九日改正する。



昭和57年度決算報告書

昭和58年度予算(案)

費目	金額(円)	摘要
前年度繰越金	121,295	
収入会金	362,000	181名×200名
特別会計利息	549,676	
雑収入	16,851	
仮受金	14,500	年会費25名分
計	1,064,322	
会議費	6,500	
事業費	710,510	開校記念品代 117,000 会報発行費 571,510
通信交通費	87,890	調査費 22,000 電話代・切手代・旅費他
事務消耗品費	0	
慶弔費	83,990	卒業証書丸筒・ヨット部団体出場他
支部配分金	152,800	関東15,200 中京 9,600 近畿26,800 高知45,200 須崎52,000 備多 4,000
雑費	20,480	
計	1,062,170	
収入	支出	残
1,064,322円	-1,062,170円	=2,152円
<特別会計>		
費目	金額	摘要
前年度未積立額	11,190,000	
本年度納入額	2,000,000	
計	13,190,000	

昭和57年度会計事務について

諸帳簿及び証券類等により監査の結果金額その他については相違なく、預金通帳・定期預金証券とも確実に管理適正に執行されてきている。

昭和58年6月18日

監査 下元征夫 ④
" 武内徳雄 ④

費目	金額(円)	摘要
前年度繰越金	2,152	
収入会金	466,000	233名×2,000円
特別会計利息	614,084	
雑収入	5,000	
計	1,087,236	
会議費	30,000	
事業費	710,000	開校記念品代 85,000 会報発行費他 593,000
通信交通費	50,000	調査費 22,000 切手代・通話料・その他 10,000
事務消耗費	30,000	用紙代・コピー代・その他
慶弔費	60,000	
支部配分金	170,000	関東17,600 中京10,800 近畿31,800 高知47,000 須崎57,800 備多 5,000
雑費	10,000	振替払込料その他
予備費	27,236	
計	1,087,236	
<特別会計>		
費目	金額	摘要
前年度未積立額	13,190,000	
本年度納入目標額	2,000,000	
計	15,190,000	

終身會費納入者名

昭和五十八年九月三十日現在

昭和十八年

昭和二十年

昭和二十一年

昭和二十二年

昭和二十三年

昭和二十四年

昭和二十六年

昭和二十七年

島崎憲一	下村晴宏	門田正猛	渡辺康太郎	前田托造	海地清幸	山田弘市	山中幸樹	長山象一	清家寛	広田四郎	中岡当明	高橋敬	竹村昌孝	田村耕吉	坂本忠男	木下善一郎	西川嘉明	矢野亀雄	橋本忠行	田辺博造	中平万年					
近森和夫	張泗海	甲藤茂	浜口義夫	片岡弥太郎	堅田速雄	浜田善三	片岡孝人	池上篤男	清藤良徳	中越背行	梅原務	井口治郎	小松章洋	国広慶助	宮本清	横嶋元幸	広瀬兼男	梅原健一	竹下増秀	松本興雄	矢野象一					
松沢真三	吉村郁雄	寺田郁雄	昭和二十一年	味元三夫	広瀬昭一	細木坦	遠藤源二郎	坂本正昭	宮本悟	武内昌良	下元逸志	梶原誠幸	北添健児	大野純輔	山崎義亀	岩山安成	梅原康一	広瀬孔建	吉岡豊延	田所定夫	片岡命長					
堀淵健三	宮崎昭男	岡村嘉夫	川添泉	大藤益富	森下春茂	岡崎範夫	山中正義	谷芳樹	島崎馨	楠本正昭	大崎栄郎	中平徳喜	森下桂郎	戸梶茂富	刈谷雅幸	笹岡雅幸	渋谷邦治	小谷浩三	亀山和夫	柏井秀有	大川内巖					
谷脇正造	岡林民夫	岡添家達	岡林縣市	和川泰輔	吉川貞造	吉村春政	岡田信雄	島崎茂	竹内正一	野瀬静夫	吉本静夫	武内徳雄	昭和二十三年	山中繁	高橋典男	谷口和夫	片田彰	古谷義幸	川村義隆	高橋繁徳	島崎良一					
福永徳七郎	横田雅範	高岡正幸	竹内良一	楠瀬富万	藤本幸造	昭和二十五年	福島孝臣	堅田雄男	中平利夫	松浦定雄	徳広善三	川村実	大崎哲	古谷正一	王子和雄	傍士忠義	上岡親雄	谷武男	竹村典和	鍋島惟孝	奥代重恭					
浜田惣助	大崎静幸	西内豊	北川万	池沢速水	秋沢英男	横田晴光	森岡清	西田浩造	昭和二十六年	須内鹿男	島岡音喜	梅原溢男	加藤美代治	横山豊一	堅田耕勇	橋田正喜	田井利晚	岡村充喜	横山三郎	武石英男	米女東作					
中嶋孝良	川村忠孝	堀見和三	井上健弘	森田泰男	福岡昭七	昭和二十七年	松浦秋生	垣内好士	市川栄	竹村寿範	中野義則	汲田信男	多田市彦	塚本拓雄	山崎一水	岡田恵淳	森岡淳	汲田正一	武政良男	長山貞雄	高野寿恵広					
																						矢野定志	西森勇	津野秀男	上田泰生	近森久重

三本正勝	藤田昭八郎	伊藤孝由	田上圭助	津野嘉三	斧山光男	田中良平	金子芳夫	前田耕一	前田重男	山崎定徳	昭和二十八年			田村志津夫	岡林幸保	梅原弘志	横川寛水	市川昌男	末松弥助	横山憲吉	昭和二十九年			田村泰雄	田村武夫	若瀬竜雄	中聖徳
中川秀市	竹下哲男	古味忠孝	上田智明	橋本盛幸	北村靖	松本忠雄	矢野勝郎	昭和三十年			中野義明	吉村正策	長信仁	上田善右	武政博明	野並充温	矢野保照	江淵俊明	上田浩俱	高野照男	西森行雄	渡辺憲太郎	岡本順次郎	戸田修史	安並利益	角西信義	
横山傳	昭和三十一年			正延善彦	奥田光男	川淵芳秀	藤田国基	谷満洲男	吉田遊亀	島中光一	三浦裕礼	浮田国広	宮本恵美子	小野邦夫	高橋英雄	浜口正憲	安井壯三	浜口一	鍋島武彦	野島有助	信高健一	山口利一	市川隆康	下元直正	田中章介		
昭和三十二年	高橋三雄	植田幸子	松村崇史	中西安男	植村豊樹	塩見崇敬	窪田邦彦	松下留吉	松下留吉	三宅世起	二見政雄	大崎光春	二宮安雄	三本和男	松村朱美	在木忠正	宮崎英雄	福井繁次	弘田貞夫	斉藤祐一	矢野親一郎	小原博信	岩本和子	梅原道夫	岡林博章	佐々木善喜	
柳瀬忠勝	木村論	松井捷輔	昭和三十三年			山崎吉広	竹村元宏	西村仁利	田村義弘	沖本毅	堅田隆幸	弘松章志	氏原和弘	西森寿彦	市川精亮	江口長靱	昭和三十四年			西森昌身	福井幸正	菅野佳紀	中村早夫	中川勝	柳本正一	山下幸三	
豊島昌男	佐々木利昌	高橋昇	大崎正導	橋田昌和	中山賀一郎	岡田慶助	中川慶助	竹内淳悟	島内栄夫	大窪英稲	明神任則	昭和三十五年			武森幸利	高橋昭之	中平俊郎	竹崎伸一	鎌倉彰	横田雅敏	西森研策	中平泰弘	増田浩	市原靖彦	吉村淳一	尾崎亘宏	
中川栄一郎	石川宏哉	松浦政志	福富正香	東喜一	中村順暘	田村祥平	浜口博至	山本誠二	昭和三十六年			刘谷茂正	山崎康夫	大原康夫	鎌倉政清	小室貞夫	高橋貞夫	渡辺寿彦	津野昌英	山中重利	竹村精史	中平憲英	山崎之彦	昭和三十七年			中村正博
村上義栄	津野公夫	清水繁雄	岡崎伸高	上岡利夫	西森楯夫	江口文夫	下川原章	千頭且典	田村賢児	藤田和明	竹崎耕作	下元征夫	宮脇功	田村義幸	田村一利	奥代一士	市川泰志	安井忠修	白石忠臣	前田憲男	昭和三十八年			竹内正英	光原直己	植田寿一	

沖野良二	河野英通	市川公博	西川政子	岡林敏雄	小島康弘	井上耿介	荻部幸子	山本勝喜	昭和三十九年	中岡敬博	鬼頭三男	西森武光	川淵輝夫	上岡照雄	竹村宏文	中城一人	橋本勝利	島崎武男	土本豊	友永詔三	野瀬皓二	梅下弘育	上野一男	福井通	
正木長生	木村正雄	津野隆	昭和三十九年	森沢文男	岡弘	合田元宏	野村直信	浜口博	昭和三十九年	石黒明洋	新田和男	前田文雄	内岡肇	高橋哲夫	浜崎満良	片岡正利	久川章	大崎豊明	昭和三十九年	松浦茂彦	小笠原郁夫	下元道弘	長尾雄司		
竹崎貞男	昭和三十九年	真辺義春	中居一郎	岡村正雄	田村義治	小松義治	下八川哲三	邑田善之	昭和三十九年	竹内正男	昭和三十九年	田村和嘉	中村徳文	森正彦	山本照幸	在木勇	笹本充範	西森英夫	岡林隆	玉川良一	池田達雄	長谷部俊夫	渡辺正俊		
横島弘明	岡村謙治	小野道明	昭和三十九年	石村秋実	玉川喜久夫	高橋保雄	中野正人	松浦育男	昭和三十九年	西森房司	藤原喜久男	今仲六男	広瀬直記	味元俊一	金子誠	谷岡直三	山本壮一郎	山下博	高木良介	高木良介	下元栄治	西森広利	池田収一		
井上文男	出来宏幸	広瀬健三	昭和三十九年	小田原孝幸	和田拓夫	西山庸一	堅田舜幸	昭和三十九年	佐々木義信	藤原喜久男	昭和三十九年	佐竹節男	柴正彦	小田道男	黒石明義	山崎敏夫	箭野文明	中屋保	岡本直美	片岡福彦	昭和三十九年	前野秀忠			
岡知秀	大崎昌則	昭和三十九年	竹崎実	中野友喜	田村正	小野三雄	大崎孝広	昭和三十九年	中城鉄夫	昭和三十九年	丸岡俊一	松岡貴也	西森新市	高橋新市	下元喜行	川村健次	柳瀬幸宏	石本正士	中井富士夫	森田賢一	谷岡孝也	宮脇潤正	西村嘉泰	川上徳男	岡田益穂
井上直昭	森光輝夫	西田太喜夫	新改一富	小野浩史	山本雅人	久万道夫	吉岡利尚	昭和三十九年	石川早男	昭和三十九年	松岡貴也	門田昭二	池田幸夫	橋田春男	海地哲篤	橋田哲臣	藤田友二	山下任陽	山岸孝益	中山安亀	遠山正司	小橋啓亮	岡田郁夫	市原正浩	

川上正雄	坂井民夫	大野孝雄	大野孝雄	山崎晋司	松本健次	桑原真一	森崎淳二	中沢和明	中野俊彦	北添俊広	山中光典	片山幸広	藤田英雄	式地秀明	藤岡大成	高鴨覚栄	山中一仁	吉本浩一	山崎勝一	政岡一勝	浜田清志	野島勝行	国沢成雄	北沢文広	川村喜一郎	
明神裕和	松本伸二	又川久仁夫	川西耕二	岡崎崇文	山添岳広	西本慎一	小野山幸久	門田壯介	浜田朋宏	安並文雄	宮谷幸彦	片岡昭一	足達義仁	山本正博	堅田裕一	片岡久明	岡田知久	山崎裕生	北添裕二	種田亮佐	宮地慎一	岡添一	細木新	林稻男		
浜口修司	岡崎幸雄	大崎幸雄	嶋崎和久	間嶋勝彦	斧山勝彦	長山治男	海原明雄	中原本之	岡橋孝平	高橋清	山崎浩二	堅田達也	明神哲人	福井由喜	芝部洋稔	南部文修	明野浩幸	津野浩幸	広畑学	橋詰幸年	朝日輝男	久岡和久	奥田望	高橋聡	楠瀬	
山本矢澄志	松尾清助	高橋孝雄	森光清	高橋俊次	浜田徹	岡村裕修	吉川裕一	西村三雄	竹林明	西岡好一	大崎功一	江崎秀次	奥崎利也	保木雄児	片岡宏	岡山幸利	山崎博幸	森光博	岡林幸一	乾井啓助	柏川清郎	市川賢作	岡村正人	浜崎保雄	尾崎保雄	
田中健喜	山崎幸稔	岡林幸治	三井修明	渡辺彰弘	田中隆弘	市川弘三	竹内久善	隅田久文	田所直人	谷脇俊光	馬場宣光	馬場宣光	山崎敏幸	佐々木敏幸	宮崎孝憲	片岡孝樹	武内秀一	弘松和弘	小松和弘	山添勇一	浜田勝章	矢野勝俊	大原祐二	井上健一	山口寿	
市川敦志	吉本忠則	森光浩明	森下浩明	宮崎秀彦	松浦永正	広瀬永正	林弘茂	林智一	浜口芳文	間部雄二	南部良	徳家保次	道家保次	田辺金造	佐竹義敦	佐竹也	坂本定浩	大原英二	大崎賢二	今橋秀広	安藤輝美	朝比奈祐介	昭和五十四年	森光俊彦		
梅原弘	馬詰博司	植田正徳	植田孝成	島崎正剛	山口広司	山光須賀男	森元志郎	松元志郎	前川修一	堀川美利彦	林俊彦	浜田隆男	中城浩伸	戸梶光男	津野徳一	谷脇久則	谷口信好	高橋信博	高橋博	坂本晴登	片岡登助	尾崎浩夫	奥崎信稔	大川内稔	戎井良裕	梅原本自

中田正造	田部貴久	谷内信弥	竹内智昭	須内裕貢	芝崎裕二	笹岡義男	北村幸浩	堅田浩司	小野利耕	大野一宏	衣斐則彦	上田育生	山本義文	矢野宝宏	森光隆浩	松田靖弘	西地繁弘	長山弘行	中野孝雄	中岡朗德	辻本真司	田村信行	谷中久良	高橋利男	笹岡幹男
青木富雄	青木伸二	昭五十五年	冲吉孝文	山川心一	柳本孝広	西村元秀	中村澄夫	中谷智行	田村一彦	田中登美夫	竹内広志	高橋広志	佐藤和也	堅田孝光	岡本光弘	石田典久	吉田智欣	森田一彦	明神孝郎	松田俊市	松浦定男	西田浩	長山孝基	長山孝文	
溝淵健夫	松坂功二	松浦伸人	広瀬幸一	浜田敏夫	野島栄生	能見清志	西森博章	西山治夫	長山誠茂	中山茂	辻安得	近沢章友	谷脇一仁	高野幸夫	高橋唯夫	柴広信	三宮隆彦	酒井則彦	甲藤章人	尾崎明彦	大崎信彦	伊藤広幸	井関直道	麻田正志	
野島慶次	能見圭至	西村佳典	西森正忠	西森幸春	梨山千春	長山勝勇	中山勝利	辻本隆裕	高野浩二	高橋秀一	高木正充	下元淳史	佐々木義晴	桑原智悟	国沢和彦	刈谷博祐	片岡博祐	冲田守稔	大崎真佐人	吉岡敏幸	渡辺敏幸	山本重光	山崎保宏	森田一宏	宮脇靖一郎
黒原靖彦	織田修蔵	小田忠志	大川豊	山脇忠司	山脇正人	森岡裕	溝淵建志	弘瀬富成	西森寿龟	西村公一	高橋祐司	下元寿夫	植村秀幸	今橋広高	石田道良	渡辺邦博	横山智英	矢野健二	矢野明	山本隆雄	山崎光彦	森岡孝夫	森順一	松田英樹	
浜田和典	橋田道明	中山浩至	田村明彦	竹内宗信	竹内信卓	坂本隆昭	近藤寿昭	楠目満二	木下譲二	片岡弘幸	尾崎義喜	岡村三男	岡弘明	大野造	大崎幸一	大崎幸一	市川和男	八木俊介	森下昭仁	松本正広	松田典久	松浦貴彦	藤本正修	中内正知	
岡林靖	大崎正二	今城秀和	麻岡雄介	青山寿行	昭五十六年	中村一也	山本順一	広瀬和弘	明神良房	壬生一光	久原三啓	浜田光啓	中脇兄志	中内光親	中内智彦	津野孝司	門脇一昭	会所辰男	大崎真一	岩佐敏弘	山下和己	山崎久	細川源井	久岡善俊	浜田幸俊
入交昭典	出間文男	吉門英喜	山下和幸	森田広幸	水口広幸	松本誠二	松尾靖浩	堀部正一	長谷川幸隆	橋田孝幸	西森忠広	仁尾常洋	中山則夫	中内智彦	中内光親	徳広和典	道家丈典	谷脇政喜	武吉秀文	竹村勇政	高橋隆彦	高橋賢治	笹岡義人	笹岡義人	酒井悟

川	森	森	森	明	宮	宮	松	細	浜	橋	野	西	西	南	中	中	戸	田	武	竹	高	白	下	笹	片
洲	本	沢	神	隆	地	崎	本	木	口	田	本	森	村	部	屋	剛	雅	村	市	崎	橋	木	元	岡	岡
章	久	幸	泰	志	男	一	健	正	弘	一	文	一	志	之	隆	彦	彦	之	介	裕	義	賢	安	久	宗
川	堅	大	岩	小	吉	毛	藤	田	谷	竹	齊	尾	市	山	味	政	西	田	下	小	楠	岡	依	山	山
上	田	石	崎	西	村	利	原	村	隆	内	藤	崎	川	本	元	岡	川	中	元	田	岡	崎	光	山	山
稔	良	高	孝	完	喜	圭	和	隆	隆	利	直	遠	真	浩	賢	幸	敏	誠	浩	章	弘	光	広	下	山
明	一	志	明	司	富	志	雄	憲	宏	夫	文	也	貴	士	一	喜	久	治	貞	司	弘	臣	悦	正	敏
嶋	坂	楠	奥	大	山	山	森	真	松	福	林	橋	野	西	中	中	中	寺	津	高	下	沢	佐	笹	坂
内	口	瀬	田	西	崎	岡	鍋	和	田	本	憲	島	景	村	平	平	島	野	京	元	丈	木	々	岡	元
孝	進	幸	裕	隆	幹	久	彦	齊	昌	祥	之	敏	介	二	隆	隆	益	栄	敦	三	児	俊	由	紀	助
志	進	則	二	晃	夫	二	彦	齊	士	祥	之	春	介	二	彦	雄	男	二	敦	三	児	俊	由	紀	助
高	笹	酒	楠	川	堅	片	斧	岡	大	打	今	井	池	池	昭	森	松	堀	広	橋	中	竹	高	田	田
橋	岡	井	瀬	島	田	岡	崎	節	西	井	井	上	田	上	和	傑	田	瀬	英	仁	孝	平	内	高	田
範	伸	俊	英	隆	勇	徹	一	夫	博	利	弘	一	英	浩	五	傑	善	錠	二	仁	孝	英	宏	秀	厚
記	雄	彦	明	博	勇	徹	一	夫	文	伸	信	秀	二	之	十	傑	仁	二	仁	孝	児	充	典	志	志
岸	川	片	小	井	吉	矢	山	山	森	明	古	浜	野	西	西	中	中	永	鶴	土	田	谷	谷	谷	田
本	上	岡	島	上	門	野	崎	岡	田	神	谷	口	村	森	森	山	脇	原	島	居	元	賢	利	和	島
明	一	彦	宏	真	榮	史	浩	樹	司	德	明	也	久	弘	二	雄	隆	盛	典	隆	昭	二	彦	史	彦
夫	敷	彦	宏	一	二	史	浩	樹	司	德	明	也	久	弘	二	雄	隆	盛	典	隆	昭	二	彦	史	彦
大	横	山	山	山	矢	森	森	森	宮	味	丸	藤	藤	弘	浜	西	西	中	中	遠	下	三	笹	坂	近
野	山	本	中	下	野	光	下	章	谷	元	岡	原	田	田	野	野	村	村	沢	山	元	官	岡	本	藤
正	郁	祐	国	雅	信	直	哉	章	秀	博	隆	敏	浩	磨	磨	嘉	一	幸	文	義	洋	男	起	健	時
明	夫	敷	治	己	平	雄	哉	章	彰	史	雄	郎	二	磨	磨	嘉	男	文	義	洋	男	起	健	時	仁
田	千	桑	堅	堅	楠	山	矢	安	森	森	宮	宮	松	藤	橋	中	戸	谷	高	洪	楠	国	北	片	岡
中	崎	原	田	田	岡	下	野	並	光	木	本	地	村	田	田	平	田	口	橋	谷	瀬	友	村	山	村
英	敏	正	廣	次	人	修	道	仁	治	文	郎	聖	二	稔	忠	敦	佳	勝	直	一	久	勉	金	裕	望
雄	司	正	廣	次	人	修	道	仁	治	文	郎	聖	二	稔	忠	敦	佳	勝	直	一	久	勉	金	裕	望
谷	多	下	笹	坂	川	尾	奥	岡	大	江	横	山	山	村	松	前	藤	広	野	奈	戸	寺	田	谷	谷
本	田	元	岡	本	島	崎	崎	崎	川	西	山	中	崎	上	本	川	本	田	島	路	田	村	村	光	岡
浩	郁	繁	英	博	雄	隆	哲	修	洋	央	博	浩	清	政	正	信	理	俊	幸	道	吉	篤	光	広	浩
統	夫	男	樹	幸	成	二	也	幸	央	齊	一	明	清	史	進	二	子	二	浩	程	孝	篤	德	幸	司

岡村弘幸	岡崎二仁	小田彰仁	大崎典成	梅木孝浩	安藤俊一	上田和正	和田浩之	吉井省二	山崎雅文	山岡秀男	森本成男	森田茂	三本憲一郎	丸岡理員	松岡幸陽	湖山祐介	藤原和夫	久岡民也	浜中一彦	西森工	西森裕之	西川裕之	中田康洋	中田和之	谷脇擁一
芳川演之	結城伸二	森本賢生	明神利則	宮尾竜生	松本明人	松田寿久	堀部明弘	藤崎新一	福原靖幸	福永靖之	原田浩文	浜田恒広	浜口賢一	西森勇志	西村博文	西川保男	津野晃	谷脇修	谷幸広	高岡幸男	小泉智靖	桑原増広	楠瀬政和	川村和宏	奥田英雄
本木謙二	明神忠男	松山哲雄	政岡宜央	牧野俊裕	藤田忠文	浜町忠作	長山庄作	中平幹雄	丁野榮一郎	津野善博	竹内佳身	高橋一寛	国広正信	楠瀬繁明	楠瀬一明	大森二男	大妻康二	大崎正弘	岡村耕平	伊与木孝司	今橋清臣	市川泰彦	池田佳正	昭和三十八年	
田中雄二	武田幸男	竹内英雄	竹内慶三	高橋国広	高橋義明	関本靖健	下元健	三宮浩嗣	佐々木志郎	桑原秀行	楠瀬章広	鎌倉由宜	片岡健児	大崎文章	尾野晃彦	梅原博之	市川昌孝	石川浩章	池田浩二	吉田靖	吉岡淳	山本建一	山崎輝男	矢野忠則	森田宏明
国広昌平	北村達也	上田秀孝	片田正也	山崎貴正	林勝也	橋田英俊	二宮英俊	田村雅忠	高橋浩幸	斉藤敏明	倉橋幸次	国本高弘	久保地啓介	門田克彦	岩崎博美	秋本修身	渡辺昌光	横山和是	柳瀬信幸	森田浩司	政岡慎二	前田隆志	南部知久	徳広重太	戸梶正和
北川雅彦	川田久	小谷健児	大崎健央	植田栄之	岩本孝幸	井上隆	市川富章	池田良夫	伊尾木彰憲	在木正光	足利和雄	渡辺伸二	横山恵司	森光一弥	真辺博一	弘田健也	浜田寿男	野田剛	野島涼助	中越将仁	中川啓介	戸田一伸	遠山公明	竹内和広	古味優司
菊地宏	刈谷隆誠	岡崎隆生	猪野司	石本洋	石井仁	吉岡伸信	柳瀬章信	森光清忠	森田雅史	森田政夫	三本正男	水田孝明	保木豊	浜町成人	羽方英一	西村俊一	西村公男	仁木民雄	谷路栄一	谷岡聡史	竹下正	白木嘉彦	笹岡紀雄	楠目勝己	木下孝二
吉門正元	松坂幸宏	山本勇助	山本時男	浜村忠士	浜田誠人	長谷川福弘	野村浩明	中山功司	中村英助	中沢定二	津野博文	田村篤彦	谷脇定夫	谷岡哲也	谷岡俊治	竹本義郎	竹林利一	竹嶋啓介	田上広明	高橋清広	下元賢司	笹岡覚	桑名勇人	国広典嗣	

以上

各種証明書の発行について (母校事務室からの伝言)

証明書が必要なときは、法令の定めにより証明書交付申請書別紙(用紙は事務室に備付)を校長宛提出しなければなりません。(第二号十八頁の様式)申請書には必要事項記入のうえ押印し左記金額に相当する高知県収入証紙を貼付してください。遠隔地からの申込みは事務手続に相当の日数を要しますので早目に申込みをしてください。又県外には高知県収入証紙は販売していないので、切手、又は現金を同封してください。

なお返信用の封筒には切手の貼付、住所、氏名、郵便番号をお忘れなく記入下さい。

手数料は次のとおりです。

卒業証明書 一通につき二〇〇円
成績証明書 一通につき二〇〇円
単位修得証明書 一通につき二〇〇円

送り先〒785須崎市多の郷和佐田甲四一六七ノ三

高知県立須崎工業高等学校事務室
電話(〇八八九四)②一八六一

②一八六二

証明書の件につき不都合または不明な点等がありましたらいつでも右記電話番号の証明係までお電話ください。

会報の発送について

会報は本人宛と職域宛に分けて発送しています。職域は世話人(幹事さん)の方々の大へんなお骨折りをいただき有難うございます。

こゝで皆様方にお願ひしたいのは会報が15通余り返送されて来ます。事務局としましては再送のできるものは再送していますが、転居先不明、宛名不十分(番地・棟番号洩れ等)、新住所で記載のこと等はこちらで何とも手の打ちようがないので、住所変更のときはお手数ですが、是非ご連絡下さいませ様お願ひ致します。

編集後記

会員の皆様、御健勝のことと思います。各支部の役員の方に、原稿をお願いしたところ、御多忙中にもかかわらず御寄稿頂き、お陰様で「会報八号」を発行することが出来ました。厚く御礼申し上げます。

これからも会報発行については、充実した内容でお届け出来る様努力したいと考えておりますので、皆様の近況や、感想、お気付の点がありましたら御遠慮なくお知らせ下さい。

印刷にあたり須崎市内の笹岡印刷所さんにお世話になりました。心からお礼を申し上げます。

会員の皆様の御多幸をお祈り致しております。

事務局編集委員

昭和五十八年十一月一日発行

発行所 高知県立須崎工業高等学校

同窓会事務局

印刷所

高知県須崎市東古市町一番十六号
有限会社 笹岡印刷所